

## 「赤ずきん」とカニバリズム

高 岸 敦 夫

はじめに

「赤ずきん」の物語はシャルル・ペローやグリム兄弟の昔話の中でもとりわけ有名なものであり、今日でも子ども向けの童話の代表的なものとして確固たる地位を持っているが、その物語の根幹をなす要素としてあるのが「人食い」である。今日ではディズニーのアニメ版のように「誰も殺されない、誰も食べられることがない、悪い狼が懲らしめられて酷い目に合うだけ」というようなものもあるが<sup>1)</sup>、それでも人食いの要素が薄められただけで完全に消し去ることができるものではないだろう。「赤ずきん」の解釈に対しては、精神分析学者たちが「赤いずきん」や「小瓶」、「母親の戒め」などを狙上に挙げてその象徴性を論じているのに対して、元々の民話にはなかったものを自分たちの都合のいいように扱っているとして、しばしば非難が向けられている。しかし「人食い」に関して言えば、ペローよりも古い形を残したものとされる民話版の方がより関係の深いものであり、人が人を食べるカニバリズムがはっきりと描かれている。本稿ではこうした「赤ずきん」におけるカニバリズムを主に西洋文学におけるカニバリズムのタイプと通過儀礼的要素との混淆という観点から論じていきたい。民話版「赤ずきん」で描かれているカニバリズムはギリシア神話やそこから想を得た文学作品でも描かれている「復讐としてのカニバリズム」の一形態と捉えることもできるが、一方でそれとは重大なところで異なりを見せている。また民話から派生し、多くの翻案・書き換えがなされたことによって、そこで描かれている「人食い」も厚みのあるものになっている。ここではそういった「赤ずきん」におけるカニバリズムの特性を明らかにしていきたい。

## I. 「赤ずきん」とカニバリズム

### I-1. 赤ずきんと狼

「カニバリズム」という言葉は一般的な辞書などでは単に「人を食うこと」や「人肉嗜食」などと説明されている<sup>2)</sup>。こうした記述を当てはめれば狼がおばあさんや赤ずきんを食べる行為もカニバリズムとなるであろうが、実際には狼のような動物が人間を食べるような事例に対してこの表現が用いられることはあまりない。カニバリズムは単に人を食べる行為ではなく、同じ種族のものを食べる行為を指す言葉という見方が強いためである。そのためグリム兄弟の版（1811）を基として流通している今日の「赤ずきん」はカニバリズムから引き離されたものだと言えるのだが、一方で「赤ずきん」にはカニバリズムが暗示されていると解釈されることも珍しいことではない。例えば「赤ずきん」を精神分析で解釈したことでとりわけ有名なエーリッヒ・フロムは狼が赤ずきんを食べた行為をカニバリズムと捉え、さらにそれが女性に対する一方的な性行為を指し示すものであると指摘している<sup>3)</sup>。また「赤ずきん」の精神分析としてフロムとともによく知られているブルーノ・ベッテルハイムは赤ずきんを食べる狼や赤ずきんを救出する猟師は共に少女が抱く父親像を表すものだと主張している<sup>4)</sup>。しかしながらこのような「赤ずきん」の狼は人間の男を表しているという見方は、20世紀に現れた思潮を待つまでもなく、17世紀末にすでに述べられている。シャルル・ペローの『昔話集』（1697）に収められている「赤ずきん」においては狼が人間の男とはっきりと結びつけているのである。

狼と言っても、すべての狼が同じ種類ではないのです。

愛想がよく、おとなしくて、機嫌がよくて、怒らない、  
懐っこくて、親切で、優しい狼もいるのです。

そういった狼が若いお嬢さんを追いかけたりするのです。

家の中まで、寝室にまでね<sup>5)</sup>。

このようにペロー版では物語の後に添えている教訓で、若い娘に対して、本当に危険な狼は人間の男であり、赤ずきんのようににはならないように注意するべきという警句が発せられているのだ。

とはいえ「赤ずきん」の由来に関しては実際の狼がモデルになっているという見方もある。民話を作られた当時は、現在とは異なり、狼は恐ろしい存在として認識されていたのであり、狼への畏怖がこの話を形成したという説である<sup>6)</sup>。しかしながら民話版、さらにペロー版やグリム版において描かれる狼の行動（人間の少女を誘惑し、騙して、食べてしまう）は実在する狼というよりも人狼を思わせるものであり、実際「赤ずきん」の狼はしばしば人狼として認識されている<sup>7)</sup>。人狼伝説の古典的な書物であるサイバイン・ベアリング＝グールドの『人狼伝説』によれば、人狼はもともと「狼憑き」と呼ばれる自分を狼やほかの動物に変身すると思ひ込む病気だったのが、「人肉を堪能するために秘術を用いた結果、あるいは大罪を犯した人間が神の裁きを受けた慣れの果て」と民衆に解釈されていたものである<sup>8)</sup>。彼らの特徴とされているのは人肉嗜食であり、狼との結びつきも絶対的なものではなく、地域によっては熊やハイエナなど別の動物に置き換わるものだ。ベアリング＝グールドの書物では人狼伝説とは直接関係のないジル・ド・レ裁判が詳細に取り上げられており、「人狼」や「狼憑き」は人間の残虐性や病理から解明できるものと見なされている。いずれにせよ狼男と人肉を食べる人間との境界は非常にあいまいなものなのである。

ペロー版やグリム版の本編においてカニバリズムはこのように深く結びつくと解釈されるものではあるが、あくまで秘められしものである。その一方で「赤ずきん」の民話版においてははっきりとした形で人が人を食べる行為が描かれている。まず登場人物について述べると、ヒロインの敵役となるキャラクターはペロー版やグリム版と同じように狼の場合もあるが、狼男や人食い鬼、さらには人間の男の場合もある。また狼男などであったとしても、残忍な性格や得体のしれなさを表す以上のものはなく、人間にはない特別な能力や特徴を示すこともない。さらに民話

版では人食いを実践するのは敵役だけではない。次の引用文は狼男が敵役として登場する民話版の抜粋である。

少女は針を集めて楽しみました。そして狼男の方はおばあさんの家につき、おばあさんを殺し、箱の中に彼女の肉を入れ、棚の上に彼女の血を詰めた瓶を置きました。少女が到着し、戸を叩きました。

「戸を押しなさい。濡れたわらで閉めているだけだから」と狼男は言いました。

「こんにちは。おばあさん、焼きたてのお菓子と牛乳が入った瓶を持ってきました」。

「箱に入れてちょうだい。中に入っている肉を食べて、棚にあるワインを飲みなさい」<sup>9)</sup>。

これはペロー版のより古い形のものとしてしばしば言及される有名なニヴェルネの民話「おばあさんの話」である。基本的に「赤ずきん」の民話版では、この版に限らず、ヒロインの少女がおばあさんの肉や血を摂取する場面が描かれている。つまり本来の赤ずきんは単に食べられるだけの存在ではない、カニバリズムを実践する人物であるのだ。

## I-2. 「赤ずきん」におけるカニバリズムの変遷

「赤ずきん」におけるカニバリズムは基本的にヒロインとおばあさんと狼（ないしそれに該当する人物たち）の三者間で行われる。ここでは「赤ずきん」の変遷を彼らの関係性やカニバリズム描写に焦点を当てて述べておきたい。「赤ずきん」のルーツとしては11世紀に書かれた話が最も古いものとして挙げられることがあるが、これは洗礼用の赤いチュニックを着た5歳の少女が狼に遭遇するというもので、物語としては「赤ずきん」とはかけ離れたものとされている<sup>10)</sup>。また中国の昔話「虎姑婆」も民話版「赤ずきん」によく似た話であることからしばしば祖上に挙がっている。この話には（「赤ずきん」の民話版に登場する）少女が身内の人

間（ここでは妹）をそれとは知らずに食べてしまう場面や（ニヴェルネの民話と同じような）用を足すふりをして逃げる場面が描かれている。こうしたことからその関連性が指摘され、さらに「赤ずきん」がアジアに由来するという説の根拠にもなっている。しかしアジア由来説は研究者の中では否定的な見方も強く、アジアの民話との関連を否定しているジャック・ザイプスなどは「赤ずきん」の原型を16～17世紀に普及するようになったフランスやチロルの民話だとしている。このような民話版「赤ずきん」の共通する特徴として挙げられるのがヒロインの少女が親族（多くの場合は祖母）を食べるというものだが、物語の結末はペロー版と同じようにヒロインが食べられてしまうというものと自力で危機から抜け出すもの大きく2つに分かれている。この両極端な結末に対する解釈としては、ヒロインが自力で逃げのびるものが本来の完全な形のものであり、悲劇的な結末のものは終わりの部分が欠落したのだろうという見方がある。先に挙げたニヴェルネの民話は自力で脱出するものの代表的なものであり、この物語が採録されたのは19世紀であるが、ペロー版「赤ずきん」の原型としてしばしば言及される<sup>11)</sup>。両者の比較からペロー版の結末は本来のものから歪められたものだとする批判を浴びている。しかしながら現存する民話版においてペロー版と同じ結末をとるものが数においては主要なものであり、またテキストの分析からペロー版の結末は本来のものが歪められたものではないと擁護する立場もある<sup>12)</sup>。

ペロー版とグリム版に関しては第3章で詳しく触れることとするが、カニバリズムに関して特徴となることを簡単に抑えておきたい。ペロー版のあらすじで民話版と比較して大きく異なっているのが、少女がおばあさんを食べる場面が削除されたという点である。一方グリム版は赤ずきんが狼に食べられた後、獵師に救出される、という今日の標準となるものである。これはペロー版に影響を受けつつも、ペロー版の結末部分が気に入らず「狼と7匹の子羊」という別の話を加えたものだと考えられている<sup>13)</sup>。ペローやグリム兄弟によるバージョンは以後の「赤ずきん」に決定的な影響を与えたといわれているが、カニバリズムの観点か

ら見ても非常に大きなものだと言えるであろう。

カニバリズムが直接的に描かれた民話版に対してペロー版やグリム版はそれが薄められたものだといえるが、20世紀になるとさらに薄まったものが現れるようになった。ディズニーの『赤ずきんちゃん』のように今日では誰も死なない、誰も食べられない「赤ずきん」が跋扈するようになった。「赤ずきん」は文学や幼児教育に取り込まれた結果、直接的なカニバリズム表現はおろかそれを連想させる残酷描写まで忌避されるようになり、誰にも安心して見せたり、聞かせたり、読ませられたりできる無害なものへと仕立てられることとなった。しかしその一方で体制側に取りこまれた「赤ずきん」への対抗からこれを大胆に転倒させようとする動きも活発にある。有名なものとジェームズ・サーバーの「少女と狼」(1939)では赤ずきんが狼を自動銃で難なく殺してしまう<sup>14)</sup>、アンジェラ・カーターの「狼の群れ」(1979)では娘が暴力的手段を用いず狼男を手懐けて自分のものにする<sup>15)</sup>。民話版の「赤ずきん」はこのような流れからみると、従来の「赤ずきん」を大胆に捉えなおしてその価値観を転倒させようとするものに呼応するものでもあるのだが、その中核となるのがカニバリズムなのである。

## II. 残酷悲劇から通過儀礼へ

### II-1. 現実の反映として描かれたカニバリズム

民話版「赤ずきん」におけるカニバリズムは何に由来しているのだろうか。その回答の1つとなる説を提示した人物の一人がロバート・ダーントンである。ダーントンは「赤ずきん」や「親指小僧」の民話版などを例として取り上げて、18世紀のフランスの民衆文化と民話との関係性を論じている。ダーントンは、グリム版に依拠して「赤ずきん」論を展開するフロムやベッテルハイムを批判しながら、「赤ずきん」のもともとのバージョンは無慈悲な世界を赤裸々に描いたものであり、秘密の象徴を用いる必要などはなかったと主張している。彼によれば、フランスの民話は空想的な色彩を帯びることはあっても、現実世界に根差したもの

である<sup>16)</sup>。18世紀のフランス民話は近親姦や嬰兒殺害、そしてカニバリズムのような残酷な描写にあふれているが、それは語り手たちが無慈悲な現生を赤裸々に語ったものだ、というのである。例えば彼は「親指小僧」における親が子供を捨てるときの事務的語り口を近世初期のフランスでは子どもの死が日常茶飯事であったことを示唆するものだと捉えている。もっともダーントンはカニバリズムに関して、民話版「赤ずきん」以外にも様々なカニバリズムの話を取り上げながらも、その行為が日常的な光景だったと事例を挙げて明言するようなことはしていない。カニバリズムが実際に日常的に行われていたというより当時の残酷な世界を誇張して描いたものとも受け取られるようなほかした叙述にとどめられている。

ダーントンは民話版「赤ずきん」のカニバリズムを当時の民衆世界の後ろ暗い部分に基づいたものとしているが、最も一般的な解釈は伝統的な儀礼を表したとするものである。つまりおばあさんを自分のものとして摂取することで、おばあさんの知恵を授かり、親族と役割を交代できる状態になることを示すためのイニシエーションを描いたものだとする見方である<sup>17)</sup>。さらにイヴォンヌ・ヴェルディエは通過儀礼のための仰々しい儀式というより、もっと日常的なものとカニバリズムを結びつけている。彼女はヒロインがおばあさんを料理するトゥーレーヌ版<sup>18)</sup>などを取り上げ、料理することができるようになるということが女性にとっての通過儀礼であったこととを関連付けている。また彼女はこのような民話版の赤ずきんと狼の行為が家畜の屠殺や解体、調理という農村での夫婦の分担作業に対応するものであることも指摘している<sup>19)</sup>。このように民話版「赤ずきん」のカニバリズムは、現実世界にある通過儀礼と結びつける解釈によって、肯定的に受け取られることにもなっているのだが、このことはカニバリズムを描いた物語の中でも非常に特徴的と言えるものになっている。



## II-2. 復讐のためのカニバリズム

前節で取り上げたように民話版「赤ずきん」は細部に当時の現実世界の痕跡がちりばめられているのだが、相手を騙して人肉を食べさせるという物語自体は珍しいものではなく、むしろ文学作品などで登場するカニバリズムの主要なパターンの1つだといえるものである。とりわけよく知られているものの1つにギリシア神話のアトレウスとティエステス兄弟の話があるが、王位をめぐる争いの後、王となったアトレウスがティエステスを騙して招き入れて、彼の子どもたちを殺して食事に出したというものである<sup>20)</sup>。イヴォンヌ・ヴェルディエも民話版「赤ずきん」のカニバリズムを「アトレウスの会食」と形容しているように<sup>21)</sup>、両者の類縁性は自明のものとして扱われているが、通過儀礼説をとる場合においてこれは蛇足になるためか、あくまで名前が挙がる程度のものでしかない。しかしながら復讐や相手を陥れるために家族を食べさせるというこのモチーフはヨーロッパの民話や昔話においてもカニバリズムの話の定番と呼べるものになっており、その関係性は軽視できるものではない。むしろ比較対照することは民話版「赤ずきん」の特徴をはっきりとさせるものになっているといえよう。民話や昔話の場合はこうした復讐のためのカニバリズムは他のジャンルのそれとは異なる特徴を見せているのだが、ここでは『グリム童話集』に収録されている「ネズの木」<sup>22)</sup>の例をして述べておきたい。この話は昔話の定番である「継子いじめ」ものであり、後妻が疎ましく思っている前妻の子を殺害し自分の夫に食べさせるという話である。通常騙されて自分の子を食べてしまう話では、食べた人間は後にそのことを知って絶望を味わうのだが、「ネズの木」の場合、そのような絶望や罪悪感は描かれず、父親は自分の子どもを（それとは知らずにはあるが）食べるという役割を淡々とこなすだけである。「ネズの木」では最終的に性悪な継母は死に、殺されて食べられた子どもは生き返るといって大団円を迎える。この「ネズの木」の類話はフランスの民話にもあり、ピカルディ地方の民話「残酷な母」がそれにあたる。この民話は「ネズの木」に酷似した粗筋であるが、継母ではなく実



の母親が息子を殺して、夫に食べさせる。また殺された子どもが生きかえることはない<sup>23)</sup>。このように民話・昔話においてカニバリズムは家族間でも平然と行われるものになっている。主人公に仇なす母親は罰せられて死ぬが、自分の子どもをそれとは知らずに食べた父親は、悪人というわけではないので、幸せに暮らしたと結末で語られるのだ。つまり主人公に敵対することが許されざる行為であって、カニバリズムは継母や実の母の残忍さを強調するものとしてしか描かれていない。これは民話版「赤ずきん」も同様に少女がおばあさんを食べてしまったことを知って絶望するというようなことにはならないのだ。

民話版「赤ずきん」もこのように「ネズの木」などの民話・昔話とカニバリズムの描写で共通しているところがあるのだが、カニバリズムが通過儀礼として解釈されるのは民話の中でも異例なものである。そのように解釈される大きな理由となるのがカニバリズムを実践するのがヒロインの少女であるところと彼女が人肉を食べさせられる動機がはっきりと描かれていないところである。狼（あるいは狼男や人間の男）が娘に祖母を食べさせた動機は明示されていないために、通過儀礼的描写と相まって、様々な解釈や対照的な見方を可能としているのだ。「ネズの木」などと同様に猟奇的な感情でもって少女を貶めようとしたとも考えられるし、特に意図はなくただ単にお腹を空かせている娘に食事をさせたとも考えられる。「赤ずきん」との関連性が指摘される中国の「虎姑婆」の場合、ヒロインの母親に変装している虎が夜中にヒロインの妹の指を食べているのを見て、ヒロインは「私も食べたい」という。虎は仕方なく指を1本食べさせるが、その時に虎が母親になりすまし妹を食べていたことにヒロインが気付くという展開である。こうした子どもに食べ物を与える一方で最終的に食べてしまおうとする姿に対しては「大母（グレート・マザー）」の肯定的側面と否定的側面と捉えることも可能であろう。大母については第3章第2節で触れるが、「赤ずきん」の狼と同一視されることがあるので、比較対照するうえで参考になるものであろう。

アトレウスがティエステースに息子たちを食べさせる話（あるいはそ

れと同じタイプのカニバリズムが描かれている物語)のクライマックスとなるのが、食後にアトレウスが真相を暴露する場面であり、文学作品などの物語では最大の見せ場となる。民話にもこれに相当するものはあるが、クライマックスというよりその後の展開のきっかけとなるものである。「残酷な母親」では殺された子どもの亡霊が「母さんがぼくを殺した、父さんがぼくを食べた」と妹に伝えて真相が明らかになる。民話版「赤ずきん」でもこれと似た形のものであるが、必要性がより薄いものになっている場合が多い。例えばニヴェルネの「おばあさんの話」では少女がおばあさんを食べた直後に雌猫が現れて次のように言う。

いやだ、ひどい匂い、なんて娘だ、自分のおばあさんを食べるなんて<sup>24)</sup>。

しかしながら少女はそう言われても特に気にすることもなく、そのあとカニバリズムについての言及がないまま話は展開し、少女は狼男の悪だくみに気が付き、自力で逃げ延びることに成功する。このようにニヴェルネの民話における猫による真相の暴露はその後の展開において特に意味を持つものではない。ただしペロー版と同様に少女が食べられてしまうという結末のもののおばあさんを食べた報いを受けることへの伏線という解釈ができないこともない。またトゥーレーヌの民話版ではおばあさんを料理している少女に対して天使の声が警告し、少女はその声を気味悪がって、食べることを断念する。このように民話版「赤ずきん」にもカニバリズムを非難する声が描かれており、カニバリズムが必ずしも肯定されているというわけではないのだが、興味深いことにそれを非難したり阻止しようとしたりするものが猫や天使のように人外のものばかりなのである。これはカニバリズムが非人間的行為ではなく、人間的行為であると示しているのかもしれないが、共同体の一員ではない、外部のものとの視点を分かりやすく表したものだとも言える。つまりある共同体における伝統的な行事が、それを気味の悪いものとして眺める外部から視点と織り交ぜて、相対化しながら描かれているのである。

民話版「赤ずきん」のカニバリズムは古くから文学でも語り継がれてきた復讐のためのカニバリズムが用いられたものであるが、当然あるものとされてきた動機や激情といった様々なものが欠落している。しかしそのことや土着化して様々な要素が盛り込まれることによって解釈の幅を広げ、新たな視点を与えることとなったのである。

### Ⅲ. ペロー及びグリム兄弟による改変

#### Ⅲ-1. 食べられる娘

「赤ずきん」は今日においても最も有名な昔話の1つであるが、今語られているのは先に述べた民話版のようなものではない。今日の「赤ずきん」に決定的な影響を与えたとされているのが、シャルル・ペローやグリム兄弟による「赤ずきん」である。しかしながら彼らによるテキストは影響力の大きさが言われている一方で、本来の話を捻じ曲げたものであるとして厳しい批判にもさらされている。民話版とペローのテキストとの違いで最もよく知られているのが、名前にもなっている「赤いずきん」であり、これはペローやグリム兄弟の影響を受けていないと考えられる民話版には見られないものであり、ペローの創作だと考えられている。その他にもペロー版の特徴と言える部分は主人公の性格や（カニバリズムの場面や結末などの）プロットの違い、教訓の付与などいくつかもあるが、ここではペロー版に対するベッテルハイムとジャック・ザイプスの批判を取り上げながら、ヒロイン像について述べていきたい。

ベッテルハイムは精神分析の立場から昔話をエディプス期の葛藤に直面した子どもがそれを克服する物語だと解釈したが、彼はその一例として「赤ずきん」も挙げている。彼の「赤ずきん」の分析はグリム版とペロー版との比較からなっているが、（彼の見方に都合がよい）グリム版の方が本来の形をしたものであり、ペロー版「赤ずきん」は本来のものを歪めたものとして徹底して批判している。その主要な批判の1つがヒロインの性質であり、ペローの「赤ずきん」の場合、何の落ち度もないヒロインが悲劇的な結末を迎えてしまうこと、さらにベッドシーンの細部

によって無邪気でかわいい女の子のはずが最終的に自堕落な女に仕立てられたことをやり玉に挙げている<sup>25)</sup>。グリム版では「道をまっすぐに進み、道草を食うことのないように」という言いつけを、狼にたぶらかされて、守らなかったことの報いであることがはっきりと示されている。獵師によって救出された後、赤ずきんはそのことを反省するのだ<sup>26)</sup>。それに対してペロー版の赤ずきんは母親に逆らってはならず、母親の言うとおりにガレットとバターの小瓶をおばあさんの所に届けたのだ。途中狼に仕込まれて遠回りになる道を進んで寄り道をするが、別に禁止されていたこととは描かれていないのだ。

一方ザイプスはニヴェルネの民話版のような話を本来の「赤ずきん」の完全な形だと捉えていて、ペロー版やグリム版は近代的な価値観によって歪められたものだとしている。ザイプスはペローの昔話のヒロイン像を家父長制擁護のために作られたものとしてしばしば批判しているが、唯一の警告物語である「赤ずきん」のヒロインは他とは異なり悪い手本として、こうならないように学ぶものとして提示されていると指摘している<sup>27)</sup>。ザイプスの説の主な根拠となるのは物語の後に挿入されている教訓の方である。

お分かりになったでしょう。若い子たち

とりわけかわいくて、器量がよくて、育ちのいいお嬢さんが  
誰の言うことでも聞いてしまうことはよくないということが。  
狼が食べたとしても不思議なことではないのです<sup>28)</sup>。

ザイプスによればペロー版「赤ずきん」のメッセージはここで示されているように、「(規範を逸脱したためレイプという罰を受けた) 赤ずきんのようにならないための振舞いをするように」というものである。さらにザイプスはペローの「赤ずきん」は女性が誘惑されたりレイプされたりすることを望んでいるという男性が持つ一般的な女性観を反映させていることも指摘している。ザイプスは民話版「赤ずきん」の語り手が周

りの世界と折り合いをつけようとしている少女に寄り添ったものだったのを、ペローが正反対なものに変えたと非難している。彼はフロムやベッテルハイムの精神分析的解釈にも難色を示しているが、それはペローやグリム兄弟によって作られた登場人物の行動にすぎないものを普遍化していることを問題視するからである。確かにザイプスのいうようにペローのテキストは男性目線で書かれたものであることに疑問の余地はないのだが、ペロー自身が赤ずきんを規範から逸脱した（それゆえに罰せられる）女性と捉えて、真似してはいけない悪しき見本として提示したとは言い難い。むしろ男性に喰われる女性としてふさわしい理想像を追求したと言えるのだが、以下ではその理由について述べていきたい。

ペロー版では削除されている民話版の要素としてよく指摘されるものとして、留め針の道と縫い針の道のうち少女が縫い針の道を選択する場面、少女がおばあさんを食べる場面、着ていた衣服を脱いで火の中に捨てる場面、用を足すふりをして逃げだすことに成功する場面などがあるが、いずれも通過儀礼に深く関わるものと指摘される箇所である。このようなことからペローは「赤ずきん」の原話から少女の成長に関わる通過儀礼の要素を取り去ったと指摘されている<sup>29)</sup>。この通過儀礼的要素の削除については、ドラリュなどのようにこれらに見られる幼稚さ、残酷さや下品さが当時の王朝時代の倫理観・価値観にそぐわないから取り除かれたのだという見方もある<sup>30)</sup>。しかしながら少女の成長や自律にかかわる部分が取り除かれ、消費されるものでしかなくなったペローの「赤ずきん」は、民話版や後のグリム版などと比較しても、下劣なものだともいえる。ペロー版で逆に付け加えた民話版にはない要素にしても食べられる少女のイメージが補完されたものになっているのである。ペローによる創作とされているもので最も有名なのが少女の名前ともなっている「赤いずきん」であるが、それとともに「(村の人々が) いままで見たなかで最もかわいい少女」と説明されている<sup>31)</sup>。民話版にはヒロインの外見に関する言及はなく、比較するとペロー版の際立った部分でもあるのだが、物語の上でそのことで最も利益を得るのは彼女を消費する側で

あり、食べ物としての味・美味しさを表すものになっている。また彼女が狼に警戒することなく話を聞いてしまったのは狼の危険性を知らなかったとテキスト上で述べられている<sup>32)</sup>。これはザイプスのような解釈もできるが、疑うことを知らないのは純真無垢さを表すものであり、処女性を強調したともいえるだろう。ザイプスはペローの昔話の女主人公が、男主人公と違って、あまり賢くない（そのためしばしば愚かなことをしてしまう）ことが美德として称揚されていることを指摘しているが、赤ずきんの性格はこれに対応するものだと見ることもできるのである<sup>33)</sup>。またペロー版では狼による2度の食人の場面が描かれるが、おばあさんをむさぼり食ったときは「3日以上何も食べていなかった」という理由がわざわざ加えられている<sup>34)</sup>。これによって2度目の食人である赤ずきんの場合は生きる上での必要なものではなく「人肉嗜食」であることが強調されている。同じ食人でも前者は栄養補給のため、後者は美食のため、というコントラストを加えて男が若い娘を食い物にすることを演出しているのである。

ペローの「赤ずきん」のストーリー・ラインは同じ結末を採用している民話版と基本的に同じものだと言えるが、彼は娘を食べてしまいたいという欲情を抱く男性の側に寄り添い、ヒロインを男に食べられる娘にふさわしいものへと改造した。彼女は食用の仔羊や仔牛と同様の存在であり、通過儀礼的要素は不要であるばかりか、料理を台無しにしてしまいかねないものであった。以上のような観点からするとペロー版のカニバリズムの削除は野蛮でおぞましい行為だったから、倫理的に許されない行為だったから、などと単純に捉えることはできない深刻な問題を孕んだものだと言えよう。

### Ⅲ-2. 呑み込まれた少女と詰められた石

グリム兄弟による「赤ずきん」は1812年に出版された『グリム童話集』第1巻に収められたもので、後世においては正典のように扱われることとなったものである。とりわけ精神分析的解釈などでは、グリム版のみ

を取り扱ったものが「赤ずきん」全体として解釈されることがあり、これは後に批判を呼ぶことになった<sup>35)</sup>。グリム版「赤ずきん」はマリー・ハッセンプフルークというユグノー派でフランスから逃れてきた一族の女性から採集されたものであり、ペローに由来するものだと今日では考えられている。そのためアラン・ダンダスはグリム版を「口承の話を文学的に改作したものをさらに改作したもの」、「正真正銘の口承伝承から『二段階』かけ離れたもの」だと述べている<sup>36)</sup>。グリム版の最も大きな特徴はハッピー・エンドに変えたことにあり、「猟師が狼の腹を切り裂いて、赤ずきんとおばあさんを救出し、皆で狼の腹に石を詰め込み、狼は石の重みで死んでしまう」となっている。このモチーフは『グリム童話集』にも収められている「狼と7匹の子羊」を借用したものだと考えられている。つまりペロー版のような結末が気に入らないため、安易に別の民話の結末をとりいれただけのものだともいえるものだが、この付け加えられたモチーフは多くの研究者を魅了し、「赤ずきん」の本質として捉えられるようになったのだ。こうしたグリム版に偏った「赤ずきん」論に対して近年は非難する声が強くなっていったが、私市保彦が指摘するようにこのモチーフは通過儀礼を強く連想させるものでもあり、フロムやベッテルハイムらの分析には通過儀礼の観点から民話版を分析したものに通じるところもある<sup>37)</sup>。またカニバリズムの観点から見ると、これまでとは別の種類のカニバリズムが導入されたということは興味深いことだと言えよう。

グリム版における「子どもを丸呑みにする」ことや「石を詰め込む」という話から最も連想されるものはギリシア神話でのクロノスとゼウスの挿話であろう<sup>38)</sup>。この話と「赤ずきん」は子どもを呑み込む、呑み込んだ子どもを排出する、石を身代わりにする、という3つが兼ね合わされていて、容易に類似性を見ることができる<sup>39)</sup>。ここではこれに関連してギリシア神話におけるカニバリズムについて、それと補完性を持つ近親姦とともに、簡潔に触れておきたい。吉田敦彦は世界中の神話における近親姦は世界秩序を乱す強烈なタブーとして扱われる一方で、既成の



秩序が転覆されたり更新されたりしないといけない場合、その転覆や更新の原動力となっていることを指摘している<sup>40)</sup>。吉田がギリシア神話で例に挙げているのがカニバリズムも行っているゼウスやティエステスであり、そこからもカニバリズムと近親姦の相関関係を見出すことができるであろう。カニバリズムには吉田が近親姦について述べているような既成の秩序を転倒させようとするものとして称揚されることがあり、特に20世紀ではラテンアメリカで西洋の植民地主義に対抗するためのスローガンともなった<sup>41)</sup>。ギリシア神話においてもプロクネーとピロメーラーの復讐はそれにあたるものだと言える<sup>42)</sup>。しかしながらクロノスやゼウスによるカニバリズムは既成の秩序への脅威を排除するためのものであったし<sup>43)</sup>、ティエステスの場合は、権力を掌握したアトレウスが排除すべき異分子であるティエステスを貶めるために行わせた行為である。プロクネーとピロメーラーにしても自身がカニバリズムを行うのではなく、相手にやらせることで復讐を果たしている。このようにカニバリズムと近親姦は共通点を持ちながらも、場合によってはコントラストをなすものである。狼と赤ずきんとの関係は、グリム版の登場以後、こうしたクロノスとゼウスのそれに相当するものとなった。つまり狼は体制側から異分子を排除しようとするものであり、一方赤ずきんは既成の秩序への反逆者である、という含意が付与されたのである。

「赤ずきん」研究でこのことに最も関連する解釈を提示しているのがユング派の研究者による「大母」の元型である<sup>44)</sup>。ユング派において神話などに登場する怪物退治は父親殺しと母親殺しの両方の面を持つ。ここでの母親殺しは自分から離脱することを許さず呑み込もうとする母親との戦うことであり、母親からの自立を獲得しようとするものである。河合隼雄はグリム版「赤ずきん」の狼を大母と結びつけているが、彼はとりわけ日本の昔話に登場する山姥などを引き合いに出しながら、大母として表されるものの両面性、子どもを慈しみ育む肯定的側面と何もかも呑み込んでしまおうとする否定的側面を指摘している。また河合はグリム版「赤ずきん」に登場する石について不妊を表すものだとしている。

これは河合も注で示しているようにフロイト左派とされるエーリッヒ・フロムの解釈を取り入れたものであるが、河合は山姥が石を食べさせるモチーフに注目して、石が大母の生産性を失うことを表すものと指摘している<sup>45)</sup>。とはいえ昔話において人肉を食べようとすることに對して、別の食べ物にすり替えてそれを回避する、というのは定番と呼べるものである<sup>46)</sup>。そのため石の象徴性はこうした人肉の代わりになる食べ物との関連も目配りした上で考慮されるものであろう。

グリム版におけるハッピー・エンドとなる展開は、別の話を安易に取り入れ、本来の話を歪曲した、ご都合主義と呼べるものである。しかしながらそれは結果としてペローによって徹底的に削られた通過儀礼的要素を取り戻させ、また狼を体制側、赤ずきんをそれに対峙する反体制派と位置づける解釈を生み出させた。グリム版によって付け加えられた部分の解釈は、それ以前に作られたもの、あるいは「赤ずきん」全体に対する解釈としては意味を為さないというわけではなく、むしろ比較対照をしやすくし、そこにある事象や問題点を浮かびあがらせることにもなっているのだ。

#### おわりに

本稿では「赤ずきん」のカニバリズムに焦点を当てて、この物語がどのような特徴を持つものなのかを論じた。民話版「赤ずきん」ではありふれたカニバリズムのモチーフが用いられているが、伝統的儀礼や民話独特の様式などが結びつくことで、単なる残忍な行為ではない、人間の営みや積み上げられた文化に深く根付くものと昇華させた。ペローやグリムによる改変という行為も、こうしたカニバリズムの物語としての民話版「赤ずきん」の立ち位置から見れば、そのこと自体は許容されるべきものであろう。重要なことは民話版「赤ずきん」におけるヒロインがおばあさんを食べるというモチーフを今後も大切に扱い、ペロー版やグリム版、そしてそれ以後の「赤ずきん」と対称的に捉えることの必要性・重要性を認識することである。「赤ずきん」はどのように世界や他者

と関わりながら生きていくべきなのか、そのことについてカニバリズムを介して、様々な少女の例を提示しながら、読者の認識を深めることを促すものであるのだ。

(本学非常勤講師)

(注)

- 1) パート・ジレット (監督)『赤ずきんちゃん』(アメリカ、1934).
- 2) 『広辞苑』第七版、岩波書店、2018、p. 591. この語の基になっている「カニバル」はもともと16世紀初頭にクリストバル・コロン(コロンブス)が伝聞で知ったカリブ海諸島で食人習慣をもつ民族に由来する言葉であり、ヨーロッパの人間が新世界の得体の知れない人たちに貼り付けたレッテルであった。そして後年になって「イズム」という語尾を付けて食人行為を表すものとして地域や民族に限定せずにより用いられる言葉になったのである。
- 3) エーリッヒ・フロム『夢の精神分析：忘れられた言語』外林泰作訳、東京創元社、1971、p. 247.
- 4) ブルーノ・ベッテルハイム『昔の魔力』波多野完治/乾侑美子訳、評論社、1978、pp. 223-242.
- 5) Pierre Erny, *Sur les traces du Petit Chaperon Rouge*, L'Harmattan, 2003, p. 17.
- 6) アシル・ミリアン/ポール・ドラリュ『フランスの民話』新倉朗子訳、大修館書店、p. 284.
- 7) ジャック・ザイプス『おとぎ話の社会史』鈴木晶/木村慧子訳、新曜社、2001、p. 54.
- 8) セイバイン・ベアリング＝ゲールド『人狼伝説』ウェルズ恵子/清水千香子訳、人文書院、2009.
- 9) Erny, *op. cit.*, p. 29.
- 10) *Ibid.*, p. 22.
- 11) ジャック・ザイプス(編)『赤ずきんちゃんは森を抜けて』増補版、広岡糸子/横川寿美子/吉田純子訳、1997.
- 12) Marc Soriano, *Les Contes de Perrault*, Gallimard, 1968, pp. 148-153.
- 13) Erny, *op. cit.*, pp. 45-48.
- 14) ザイプス、*op. cit.*, p. 334.
- 15) *Ibid.*, pp. 411-424.
- 16) ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』海保真夫/鷺見洋一訳、岩波書店、1969、p. 42.

- 17) Cf. *Ivonne Verdier, Le petit Chaperon rouge dans la tradition orale*, Édition Allia, 2014, ザイプス, *op. cit.*, 私市保彦/今井美穂『「赤ずきん」のフォークロア』新曜社、2013.
- 18) Erny, *op. cit.*, pp. 30-32.
- 19) Verdier., *op. cit.*, pp. 27-35.
- 20) 「ティエステースが来たときに、彼が水のニンフより得た子供たち、アグラオス、カリレオン、オルコメノスを、彼らがゼウスの祭壇において命乞いをしたにもかかわらず、殺害し、八つ裂きにし、煮て、彼らの端の部分を除いて、ティエステースに供し、彼が飽食した時に、端の部分を示し、そして国外に放逐した」(アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波書店、p. 180).
- 21) Verdier, *op. cit.*, 28.
- 22) ヤーコブ・グリム/ヴィルヘルム・グリム『初版グリム童話集』2、吉原高志/吉原素子訳、白水社、2007, pp. 123-142.
- 23) Henry Carnoy, *Littérature orale de la Picardie*, Maisonneuve, 1883, pp. 229-236.
- 24) Erny, *op. cit.*, p. 29.
- 25) バッテルハイム、*op. cit.*, p. 224-225.
- 26) Erny, *op. cit.*, pp. 18-22 .
- 27) ザイプス『おとぎ話の社会史』、p. 46.
- 28) Erny, *op. cit.*, p. 17 .
- 29) ザイプス『赤ずきんちゃんは森を抜けて』p. 504、私市、*op. cit.*, pp. 192-193.
- 30) ミリアン/ドラリュ、*op. cit.*, p. 283.
- 31) Erny, *op. cit.*, p. 15.
- 32) *Ibid.*, p. 15.
- 33) ザイプス『おとぎ話の社会史』、pp. 50-51.
- 34) Erny, *op. cit.*, p. 16.
- 35) Cf. ダーントン *op. cit.*、ザイプス *op. cit.*
- 36) 「ダンダス『赤ずきん』の精神分析的な解釈」「『赤ずきん』の秘密」紀ノ國屋書店、1994、p. 255.
- 37) 私市、*op. cit.*, p. 55, p. 75.
- 38) エルニーの「赤ずきん」の研究書においても、付録で「石」の象徴性を説明した項で、クロノスのことが言及されている (Erny, *op. cit.*, p. 243).
- 39) 「大地と天空とが彼に予言して、自分の子によって支配権を奪われるであろうといたので、彼は生まれた子供たちを飲み込むを常としていた。レアーは石を襁褓にくるんで生まれた子供のごとくに見せかけ、クロノスに呑み込むようにと与

えた。ゼウスが成年に達するやオーケアノスの娘メーティスを協力者とした。彼女はクロノスに薬を飲むように与えた。薬の力で彼はまず石を、次いで呑み込んだ子供らを吐き出した」(アポロドーロス、*op. cit.*, pp. 29-30)。

- 40) 吉田敦彦『神話と近親相姦』青土社、1982、p. 30.
- 41) とりわけブラジル・モダニズムの詩人オズヴァルド・ヂ・アンドラーヂによるマニフェスト「食人宣言」(1929) は名高いものであり、後世に大きな影響を与えた (Andrade, de Oswald, « Cannibalist Manifesto », *Latin American Literary Review*, Vol. 19, N. 38, 1991).
- 42) アポロドーロス、*op. cit.*, pp. 164-165.
- 43) ゼウスはウーラノスやクロノスと同じ運命をたどることを避けるため最初の妻メーティスを呑み込み、後にゼウスの頭からアテーナーがとびだした。「ゼウスは、彼が近づくの避けるためにいろいろな形に身を変じたメーティスと交わった。彼女が孕むや時を逸せず呑みこんだ。大地がメーティスが彼女から生まれんとする娘の後に一人の男の子を生み、その子は天空の支配者となるであろうといったからである。これを懼れて彼女を呑み下したのである」(アポロドーロス、*op. cit.*, p. 34).
- 44) ユング派の解釈にも様々なものがあるが、ここでは「赤ずきん」の狼が大母であると明示している河合隼雄を取り上げることにする。ユング派と「赤ずきん」の関係についてはエルニーの研究書でもまとめられている (エルニー、*op. cit.*, pp. 184-186).
- 45) 河合隼雄『昔話と日本人の心』岩波書店、2002、pp. 68-69.
- 46) 例えば「グリム童話集」初版の「白雪姫」では王妃が自分の娘の美しさを嫉んで、彼女を殺害してその証拠として肺と肝臓を持って帰るように猟師に命じた。猟師は娘を哀れに思い、娘を逃がして、代わりに猪の肝臓を王妃に献上した。王妃は喜びそれを釜茹でにして食べた (ヤーコプ・グリム/ヴィルヘルム・グリム、*op. cit.*, p. 176).